

Title	Frederick L. Schuman ; Soviet politics, at home and abroad., 7th imp.
Sub Title	
Author	田中, 荊三(Tanaka, Keizo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1951
Jtitle	史学 Vol.25, No.1 (1951. 7) ,p.118- 120
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19510700-0118">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19510700-0118</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アラビア史料の發言權が極めて大きいことは言を待たぬ。

井筒氏は序文で、本書はアラビア語學としては最少限度のものに過ぎないが、この程度までを確實に自分のものとすれば、千夜一夜物語のような通俗文學の鑑賞や、現代アラビア諸國の新聞・雑誌・小説・評論の閱讀には充分で、「また、史學的研究の必要からアラビア語古文献の利用を欲する人も」相當程度までその目的を達することが出来ると云つてゐる。して見れば本書の果すべき役割は極めて大であると云わねばならぬ。

ただ、ここに一つ希望を述べると、もつと譯讀の部分が欲しいのである。本書一つにそれを望むのは無理であろうが、もう一冊別にクリスマシーを編まれて、それに譯讀を附して頂けたら、またそれが手頃なアラビア文學史の代りにもなる様なものであつたら一層喜ぶ人が多いと思う。現在の事情では、種々のアラビア語の書を海外から購入することは困難であるから尙更である。千夜一夜物語の如き、成程極めて大衆的のものであろうが、觀方によつては、民俗其他各方面の文化現象研究資料として役立つ點が多く、この點からも尊重すべきものと思われる。所が、そのアラビック原典入手することさえ、今は中々困難である。

少し傍道へ外れるが、我が國に於けるアラビア語文献のコレクションとしては、台北大學にあつた Clément Huart の舊藏書と、滿鐵東亞經濟調查局の Gabriel Ferrand 舊藏のものとが一

番まとまつたものであつたと思うが、その二つとも終戰と共に失われた。本書の刊行を見るにつけ、主要な刊行本だけでも一通り揃えた文庫が設立されたら、どの位よし事であろうと思われる。これが無かつたならば、折角、本書の如き好著が現われても、我國のアラビア學はいつまでも停滞を續ける外ないであろう。

〔前嶋信次〕

Frederick L. Schuman; Soviet Politics,  
At Home and Abroad. 7th imp. 1949, 663 pp. Borzoi  
Book, New York.

第三章に”成吉思汗の幽靈”なる1節がある如くに、遠くは成吉思汗の時代より近くは第二次世界大戦の終末に至る迄のロシヤの歴史が述べられてゐるが、勿論ソヴィエットの政治、特に一九一七年のレーニンのロシヤ歸國後の政治的變化に重點がおかれてゐる。レーニンの”外交と國內政治とを切り離して考へる程誤り易く而して有害な考へはない”との言を序文に引用し、表題にも國內及び外國に於けると明記し、ソヴィエットの政治を國の内外の面より理解し易く叙述されて居り、且つ初めと終りの部分及び靜的な面より動的な面に重きをおいたと述べられてゐる如くに

展的に叙述せられて居り、之等の點に於てはよくその目的を果されてゐると考へられる。

戰後の諸問題、特に國際連合の拒否權等をめぐつて米ソの對立が明らかとなり、米國の輿論が漸次反ソ的となりつゝあるのを見えて”金錢による民主主義の腐敗及び專制による社會主義の墮落がとめることが出来ないなら、二つの世界の最善のものが新らしい結合體に結びつけられないならば、一つの世界は償ひ得ざる程に傷つけられ、そして自由主義の總てこの希望は衰へそして亡びるであろう”と考へる著者はアメリカ國民にソヴィエットの政治を理解せしむることによつて、反ソ的な感情を緩和せんとの希望をもつて書かれたのである。それ故ソヴィエットの政治を辯護するに努力してゐる。ソヴィエットが反感を持たれる重大な原因の一つはソヴィエットに自由のないと云ふことであるが、自由に對する著者の見解を見てみよう。

先ず序文に於て、我々の時代に於ける自由の主なる敵は失業、寛大でないこと、そして戰争であり、ソヴィエットは自由主義的な方法ではないが、力強く總て之等の克服に努力したと述べ、更に本文に於ては、ソヴィエットの理論に於て自由は元來缺乏及び恐怖からの自由より成つて居り、歐米人は一九一七年以來ソヴィエットの大衆の大部分にとつて缺乏及び恐怖が共通の運命であると考へてゐるが、恐怖と缺乏は程度と同様に種類に相違があり、

悪い住居、乏しい衣服、食しいそして單調な食物はロシヤの大衆と同様に歐米人の大衆の共通の缺乏であり、恐怖については歐米人が破産、失業、窮乏を恐れるに比して、ソヴィエットに於ては黨の線に沿つてゐる限り、それらの心配より免れて居り、歐米に於ては生産分配の定期的な崩壊より来る經濟的現象が恐怖であるが、ソヴィエットに於ては正統派の意見の遵奉者が寛大でないことをより起る政治的現象が恐怖であるが、理論的にどつちの恐怖がより恐ろしいかを決定するのは困難であり、自由なる言論のない仕事の方が、仕事のない自由なる言論より、より良いやうに考へられると論じ、普通人の日々の生活の條件に於ける相違の性格が、歐米人にとつてソヴィエットに於ける自由の問題を効果的に分析し得る唯一の可能なる基礎であると説いてゐる。

更に著者は自由主義者がボルシェヴィズムを粉碎せんとして武装せる十字軍を説く限り、ソヴィエット國民の壓倒的多數にて支持せられるソヴィエットの政黨家は分離主義者に對する監視を決してゆるめず、このことは更に自由主義者をしてソヴィエットの血なぐまき殺害を非難せしめることになり、かかる惡循環を脱せんする方法はソヴィエットにはないと断じ、ページについてても、陰謀の鎮壓にソヴィエットは一人の無罪のものを罰するよりも千人の罪人を見逃した方が良いと云ふ古代の金言を斥け、唯一の裏切り者を見のがすより、千人の罪のない者を清算する方をよ

り好み、この方法は論理的に、法律的に厭はしいものであるが、最大多數の最大幸福のために必要と考へられ、ソヴィエットにとつて生死の問題であり、陰謀が粉碎されなかつたならばソヴィエットはチエツコ・ズロヴァキア、ノールウェー、オランダ、ベルギー、フランス等と運命を等しくし、日獨がソヴィエットのみならず英米をも破つたであろうと述べてゐる。

之等の議論は相當に問題の存する所であつて、此の書を讀むことによつて寧ろ共産主義に對する自由主義の立場の相違を明らかにするのみであつて、著者の希望せる如くに二つの世界を調和せしむることが非常に困難なることを感ぜしめる。然しこの書が一九四六年二月に最初に出版せられて以來、一九四九年一〇月迄に版を重ねること七回に及んで居り、反ソ的な空氣の強くなつてゐる米國に於て相當に讀者を得てゐるのは興味あることである。

(田中荊三)

的な記述を一切避けて直接にその表現及び内容の問題に觸れて論じて見たいと思ふ。筆者が之までに耳にした同書の評判は非常によいか、非常に悪いか、何ちらかであつた。前者によれば著者の社會經濟史家としての研磨の跡が膨大な史實への沈潜と學說回顧の中に辿られ、その構造論的な把握は参考文献の豊富な照會と共に後進に幾多の貴重な示唆を與えるものであらうと言うのである。ところが後者によるとこの書は徒らな大言壯語に充ち美辭麗句をつらねて言葉の遊戯をしているに過ぎず、從來の研究に比して何等の獨自性も見られず、獨語や佛語を無用に挿入したその術學的な記述は必しも明確でないその論理と共に鼻もちがならぬと言うのである。

由來こうした史論的な著述に惡意をもつて所謂あらを探せば限りのないものである。然し上記の評判は何れも筆者の知る限りでは著者と全然無關係と思はれる人々から出たものであつた。して見ればこの書は善惡何れにてもあれ、確かに問題の書であることは否定し得ない。それに歴史の参考書として如何に考うべきかについて學生諸君からも度々質問を受けた。幸ひ著者は面識もあり、増田氏が後者の評する如き所謂いやけた人物でないことも屢々證言して來た自分としてはその評判のよつて來る所を改めて検討し、また同學の士としても氏の學風に十分な敬意を拂うに吝かなものではないが而も學說は學說として批判すべき義務を痛感す